

れき じん
となん歴史民だより vol.15

Morioka tonan history and folklore museum

平成20年6月24日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 TEL019-638-7228

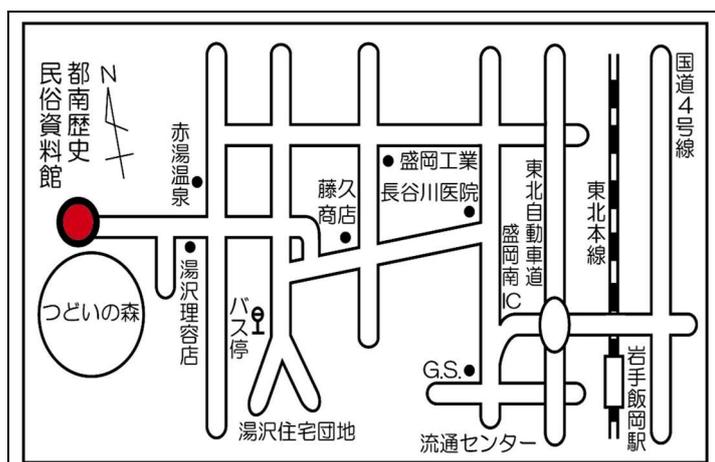


市民参加展「ラジオいろいろ展」

— もくじ —

- ・ <特別寄稿>盛岡の津軽町と舟橋騒動始末 ～前編～
- ・ 玉山歴史民俗資料館紹介
- ・ 報告 市民参加展
- ・ 資料は語る⑮
- ・ 指定文化財紹介⑮
- ・ となんの昔ばなし⑮

MAP☆ACCESS



○利用案内

- 開館時間 午前9時から午後4時まで
- 入館料 無料
- 休館日 月曜日
(休日に当たるときは、直近の平日)
- 年末年始

盛岡に津軽町があったと聞くと、多くの人は耳を疑います。江戸時代に盛岡藩と津軽藩が必ずしも好意的な関係でなかったことを知っているからです。

○ 津志田と元津軽町のこと

明治10年(1877)の岩手県管轄地誌の村史には次のように記されています。

「陸中国紫波郡津志田村、本村ハ古時岩手郡ニ属シ天正十六年本郡属ス 津軽町村頃ニ天正年中、奥州津軽ノ民 其主ニ服セズ南部民ニ帰スル者多シ 南部民此地ニ就産セシムニ依テ村名トス モト兩村アリ 文化元年(1804)合シテ一村トナル」(津志田村は岩手郡に属していましたが、天正16年に紫波郡になりました。天正の頃に領主に従わない多くの津軽の住人たちが南部に住み着き、津軽町と呼ばれるようになりました。もともとは津志田村と津軽町村は別々の村でしたが、文化元年に合併して一つの村になりました)

また、寛延4年(1751)の「増補行程記絵図」(清水秋全)には次のように記されています。

「寛文五年十一月之頃、津軽町を津志田町と改、又今 津軽町と可申旨被仰出よ 大膳様御代 津軽のもの 御国をしたひ来 是処ニ被差置たると承り候」(この絵図は 寛文5年11月頃の津軽町(の様子です)。津軽町は一度津志田町と改められましたが、今は津軽町の町名復活の動きがあるそうです。南部大膳様(11代藩主利敬公)の頃に津軽の住民たちが大膳様領を慕って、ここに寄り住んだと聞いています)

菅江真澄の天明6年の紀行文には「南部盛岡見前村のこなた津志田といふ。此の津志田にそのむかし大浦右京為信公の旧宅あり。そこを古は津軽村といひし処也」と記されています。

色々な記録から盛岡に津軽町があったのは確かです。そして津志田と津軽の関係は、今から400年前の南部家27代利直公の頃、南部の国を慕って来た人々を津軽町を設けて移住させたと伝えられています。津軽のどこから来た人々なのか、その子孫はどこの家か、私はその歴史と足跡を記録しておきたいと調査に当たってきましたが、不明のことも多くあります。



[増補行程記絵図 部分]

(盛岡市中央公民館所蔵)

—盛岡市玉山歴史民俗資料館紹介—



資料館外観

資料館の成り立ち

教育の一環として巻堀小学校の児童、地区民が収集した土器・石器、民具など多数の資料が巻堀小の郷土資料室に展示されていましたが、創立百周年の記念事業として文化遺産を永く保存活用するため、別棟の記念資料館建設計画が進められました。この計画はやがて旧玉山村の郷土資料館としての計画に発展し、寄付金や敷地提供などの地元協力に呼応した旧玉山村の熱意は県、文化庁の認めるところになり、それぞれの助成のもとに玉山村歴史民俗資料館ができました。現在では旧玉山村と盛岡市との合併に伴い、盛岡市玉山歴史民俗資料館になっています。

- ・開館時間：午前9時～午後4時(見学には事前に予約が必要です。)
- ・休館日：毎週月曜日(祝日のときは翌日)、年末年始
- ・入館料：無料
- ・所在地：盛岡市玉山区巻堀字巻堀 33-2
- ・お問合せ先：渋民文化会館(019-683-3526)
- ・主な所蔵資料：考古資料、歴史資料、民俗資料



資料館展示室

参考・引用資料／玉山歴史民俗資料館パンフレット

報 告

4月23日～5月25日

市民参加展「ラジオいろいろ展」

当館では、市民参加展として市民の皆様のコレクションや研究を紹介しています。「ラジオいろいろ展」は、今年度の第1弾の企画で鎌田 隆さん(盛岡市天神町)のコレクションを紹介しました。

今回の展示会では、昭和初期の木製ラジオから現在のキャラクターラジオまで100点以上を紹介し、多くの見学者が訪れ、大盛況でした。

次回は、7月16日から8月24日までの予定で、「おもちゃいろいろ展」を開催します。

資料は語る ⑮田下駄(たげた)

当資料館の収蔵資料をひとつ取り上げて紹介します



泥土上の作業で、足の埋没(まいぼつ)を防ぐために履いた木製板状のものです。イタカンジキ、ハコカンジキ、ナンバなどとも呼ばれていました。深田(ふかだ)での作業に使われるので『田下駄』と総称されます。

参考・引用資料

「稲作における農機具の変遷」

農林水産技術会議事務局 1990

盛岡市所在指定文化財紹介⑮

国選択 記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財

チャグチャグ馬コ

昭和53年（1978）1月31日選択 盛岡市・滝沢村



滝沢村の駒形神社（鬼越蒼前神社）で行なわれる民俗行事で、現在では6月の第2土曜日に神社から盛岡市の盛岡八幡宮までの15kmを約100頭の装束馬がパレードする観光行事で知られています。古くから旧暦の端午の節句には農作業を休み、馬を美しく着飾って蒼前神社に参詣し、馬の健康と安全を祈願しました。馬の首につるした鳴輪と装束

につけた鈴とが歩くたびに鳴り、その音がチャグチャグと聞こえたことから祭りの名が生まれたといわれています。以前は盛岡市玉山区の芋田駒形神社でも行なわれていましたが、国道4号線沿いで交通事情が悪く、中止されてしまいました。

参考・引用資料 盛岡市教育委員会 『盛岡の文化財』 1997

岩手県立博物館 『岩手民間信仰辞典』 1991（財）岩手県文化振興事業団

となんの昔ばなし⑮

『黒川の湯』

黒川の観音堂の奥、沢というところに温泉がありました。その里に住んでいる人は繫温泉が通じているといっていました。それが冷泉（れいせん）でした。

地主は風呂場と湯治客（とうじきゃく）の小屋をたてました。冷泉の成分は不明でしたが「カブレ」によく効くというので、地元はもちろん、盛岡、矢巾、紫波方面から泊まりがけで来て五、六室はいつも満員でした。

湯主は、黒川の吉田大吉で経営すること十数年、明治三十年頃廃止になりました。その後、昭和初期に復活をして、黒川の湯として近くの村里からよろこばれましたが、昔のように繁昌（はんじょう）せずには終わりました。現在は、その地に湧水の池と、山の神の祠（ほこら）が残っているのみです。

■出典『となんの民話』（都南歴史民俗資料館）